

好きな場所

国際コミュニケーション学部

王 華 坤



私は中国から来た留学生で上海外国語大学でも勉強したことがあります。日本に来てびっくりしたことはいろいろありますが、なかでも勉学にかかわることといえばやはり図書館だと思います。なぜなら、図書館がこんなに便利に使えるとは来る前にはぜんぜん想像がつかないほどですから。設備内容の良し悪しはともかく、図書館が確実に学生たちに使われているという点がもっとも重要ではないかと考えています。実は上海の母校の図書館は最近建てられたばかりです。けっこう立派な建物であるわりに、使用率があまり高くないようです。別にみんな勉強が好きでないわけでもないのですが、そうなるのは開館・閉館時間の合理性が欠けているのです。平日の閉館時間はほぼ授業の四限目と同じくらいですから、もちろん学生たちは授業の終わったあとに行けないでしょう。しかし、留学したのがきっかけで、私には図書館の新しいイメージを与えられました。まず、開館時間は本当に学生の都合に合わせるよう心がけていますね。授業が終わった後、一回夕食を食べに学校を出たとしても、まだもどってきて利用する余裕があると思います。ちなみに、私は日本に来た初めのころは言葉もよく通じないですし、友達もできてなくてよく悩んでいました。ところが、図書館の3階には懐かしい雰囲気がかんがえて心が慰められました。寂しいときにもここで中国語の小説を借りて読みながら、不慣れな心を落ち着かせて日々を無事に送りました。これからも、毎日必ず行きます。勉強する以外にも、インターネットで友達とメールを交換したり、チャットしたりしてリアルタイムの母国に窓を開くこともあります。

図書館は本来の意義は図書、記録その他の資料を収集、整理、保管およびそれらを必要とする人の利用に供することです。しかし、時代が移り変わるにつれて図書館も変わらなくなりません。今の愛大図書館はまさにその良い典型として存在しています。そのように思う留学生は多分私だけではないでしょう。

〈温もりのある図書館を〉

大学院文学研究科

松 村 美 奈



書架をぐると眺める。そういえばあの本はこの辺りにあったはずだが……見当たらない。コンピュータで検索してみる。そしてまた書架を眺める。見つかった！では次に奥の書庫に入ってまた別のあ

の本を探してみるとするかな……。

とにかく私は館内を縦横無尽に移動する。周りからはきつと落ち着きのない人間だと思われるだろうが、自分はそんな風に回り道しながら色々な本を探していく過程が好きなのである。今の図書館は蔵書データベース等も充実し、検索にさほど時間はかからなくなった。しかし、その液晶画面に現れた文字を頼りにただ本を探し、見つければ「ハイ、ソレマデヨ……」ではなんとも味気ない。この巨大空間に何万冊もの書物が納まっているのだ。どんな本が眠っているのだろうか？想像するだけでワクワクする。そんな未知なる書物の存在をじっくり体感したいという願望から、探す楽しみを見出し、図書館内を歩き回ってしまうのだ。

私にとって図書館は書物（資料）と自分を繋いでくれる大切な場所である。自分の研究の性質上、古い書籍等を扱うこともあるのだが、こういった類は煩雑な手続きを伴う場合が多い。そんな時にはいつも係の方々助けられている。このように幾重にも人の手が介在することで、私は未知の資料と出会うことができるのである。このことを心に留めて書籍を繙きたいと思っている。

これからの図書館は、今よりもコンピュータ化が進み利便性を追及してゆくことになるだろう。しかし行き過ぎれば表情のない図書館にもなりかねない。愛大図書館には、無機質な冷たさなど似合わないと思う。どこかホッとするような温もりのある〈風景〉を残してほしいのである。事務的な対応が迅速になることは大変有難い。しかし一番大切なのは利用者との相互関係が常に円満であるということに尽きる。そしてこれから先、どんな人に対しても平等に「知への扉」を開け放しているような、懐の深い図書館となっていくことを私は望む。